

令和 6 年 4 月 24 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02940

研究課題名（和文）ユニバーサル化時代における学士課程教育の質保証のあり方に関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Research on Quality Assurance of Undergraduate Education in the Age of Universalization

研究代表者

葛城 浩一（KUZUKI, Koichi）

神戸大学・大学教育推進機構・准教授

研究者番号：40423363

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では「ボーダーフリー大学（以下、BF大学）における「研究」は教育の質保証にどのような影響を与えるのか」という問いに迫るべく、BF大学において「研究」がどのように捉えられており、それが教育の質保証にどのような影響を与えるのかを、組織、教員、学生という3つの視角から多角的に検討した。その結果、「研究」が何たるかを自分なりの言葉で表現することさえできないまま卒業してしまう学生が少なくない可能性があるという惨憺たる現実がみえてきた。すなわち、上記の問いに対してこたえうる状況には現時点ではなく、こうした現実の打破こそが、BF大学が「研究」を通じて教育の質保証を果たす一歩となることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

BF大学は高等教育研究における研究対象としてこれまで等閑視されてきた。近年では、BF大学を対象とした研究も散見されるようになってきてはいるが、そうした研究は社会的期待が非常に大きい「教育」に焦点を当てたものであり、それがさほど大きなものではない「研究」の視点が十分であったとはいえなかった。BF大学が「教育」と「研究」を主要な機能とする「大学」である以上、その教育のあり方について考える上では、「研究」に焦点を当てることも極めて重要である。本研究では、BF大学において「研究」がどのように捉えられており、それが教育の質保証にどのような影響を与えるのかを多角的に検討しており、その学術的意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：In order to answer the question "How does research in low-prestige universities affect the quality assurance for undergraduate programs?", this study examined how research is perceived at low-prestige universities and how it affects the educational quality assurance from the three perspectives of the organization, the faculty, and the students. As a result, we found that many students may graduate without even being able to express what research is in their own words. In other words, the current situation is not conducive to answering the above question, and we pointed out that overcoming this reality would be a step towards low-prestige universities fulfilling its educational quality assurance through research.

研究分野：高等教育研究

キーワード：ボーダーフリー大学 教育の質保証 教育と研究

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「ボーダーフリー大学(以下、BF 大学)」とは、「受験すれば必ず合格するような大学、すなわち、事実上の全入状態にある大学」のことである。BF 大学に相当するであろう定員割れを抱えた大学は、私立大学全体の4割前後で高止まりしており、経営上の採算ラインの目安とされている定員充足率80%を下回る大学はその半数程度に及んでいる。18歳人口が減少の一途にあることに鑑みれば、そうした大学は今後急増することだろう。

こうしたBF 大学は、入試による選抜機能が働かないため、基礎学力や学習習慣、学習への動機づけの欠如といった、早ければ小学校段階から先送りされてきた学習面での問題を抱えている学生を多く受け入れている。学生が入学時点でそうした学習面での問題を抱えていることを前提としている分、BF 大学で学士課程教育の質を保證すること(以下、教育の質保證)は容易なことではない。だからこそ、国際的にも教育の質保證が求められている現状において、日本の高等教育の裾野に位置するBF 大学における教育の質保證について考えることは、極めて重要である。また、BF 大学には日本の高等教育(特に大学)が抱えている問題が凝縮されて顕在化していることに鑑みれば、BF 大学における教育の質保證について考えることは、日本の高等教育における教育の質保證について問い直すことになるという意味においても、極めて重要である。

このように、BF 大学における教育の質保證について考えることは極めて重要であるが、そこに焦点を当てた研究は、研究代表者を除けば皆無である。そもそもBF 大学自体、研究対象として扱われることはこれまでほとんどなかった。近年、BF 大学を研究対象とした先行研究も散見されるようになってきてはいるが、その多くはそこに所属する学生を分析対象としたものである。すなわち、教育を提供される学生側に関する知見は蓄積されつつあるが、教育を提供する大学側に関する知見はあまり蓄積されていない。BF 大学における教育の質保證について考える上でも、特に後者の知見の蓄積は非常に重要である。

そこで研究代表者は、研究対象として十分に扱われてこなかったBF 大学の、さらに教育を提供する大学側に焦点を当て、BF 大学における教育の質保證の実現可能性について明らかにすべく、2017年度から3年間、科学研究費補助金基盤研究(C)「ユニバーサル化時代における学士課程教育の質保證の実現可能性に関する研究」(研究代表者:葛城浩一)において検討を行った。具体的には、学部長を対象としたアンケート調査や教員を対象としたアンケート調査に基づき、BF 大学における教育の質保證の実現を促進・阻害する要因を明らかにした。

しかしこの研究は、「大学」の主要な社会的機能である「教育」に焦点を当てたものであり、いまひとつの主要な社会的機能である「研究」の視点が十分であったとはいえない。BF 大学は「教育」に対する社会的期待が非常に高い大学であるとは考えられるが、BF 大学が「大学」である以上、その教育の質保證のあり方について考える上では、「教育」だけでなく「研究」に焦点を当てることも極めて重要である。すなわち、これまでの研究では十分に検討の及ばなかったのが、本研究課題の核心をなす「BF 大学における「研究」は教育の質保證にどのような影響を与えるのか」という問いなのである。

2. 研究の目的

本研究が目指すのは、BF 大学において「研究」がどのように捉えられており、それが教育の質保證にどのような影響を与えるのかを、組織、教員、学生という3つの視角から多角的に明らかにすることである。具体的には、組織の視角からは、組織の「研究」に対する姿勢が表れるで

あろう「採用人事」に着目した検討を行い、BF 大学において「研究」がどのように捉えられているのかを明らかにする。また、教員、学生の視角からは、BF 大学に所属する教員（以下、BF 大学教員）、BF 大学に所属する学生（以下、BF 大学生）を主対象としたアンケート調査を用いた検討を行い、BF 大学教員、BF 大学生のそれぞれに「研究」がどのように捉えられており、それが教育の質保証にどのような影響を与えられているのかを明らかにする。

3．研究の方法

組織の視角からは、組織の「研究」に対する姿勢が表れるであろう「採用人事」に着目した検討を行うべく、国立研究開発法人科学技術振興機構が運営する研究人材のためのポータルサイト「JREC-IN Portal」に掲載されている求人公募情報を用いた検討を行った。「機関種別」で「国立大学」、「公立大学」、「私立大学」に加え、「短期大学」、「専門職大学」、「専門職短期大学」、「高等専門学校」、「専門学校（専修学校専門課程）」という条件で、また「職種」で「教授相当」、「准教授・常勤専任講師相当」という条件で検索をかけてヒットした公募情報の収集を、2020 年度の1年間を通して毎月第2週及び第4週の半ばに行った。収集した公募情報は9,456件である。

学生の視角からは、BF 大学生を主対象としたアンケート調査を用いた検討を予定していたが、それに加えてインタビュー調査を用いた検討を行った。まず試行的に、偏差値30台半ばのA大学の学生を対象にアンケート調査を実施した（2020年7月～8月）。有効回答者数は224名である。そしてその知見をふまえ、同じくA大学の教育系の学部所属する3・4年次生10名と、偏差値40台前半のB大学の社会科学系の学部所属する4年次生10名を対象にインタビュー調査を実施した（前者は2021年7月～8月、後者は2021年11月～2022年2月）。さらに、これらの知見をふまえ、西日本（関西、中四国）に所在する5つの私立大学の社会科学系学部所属する学生を対象にアンケート調査を実施した（2022年11月～2023年3月）。このうちBF大学に該当するC大学とD大学（いずれも偏差値40未満）の有効回答者数はそれぞれ84名、115名の計199名である。

教員の視角からは、BF 大学教員を主対象としたアンケート調査を用いた検討を予定していたが、経費上の都合で変更を余儀なくされた。具体的には、学生の視角からの検討を補足する形で、上記A大学の教員3名を対象にインタビュー調査を実施した（2022年9月～11月）。また、BF大学に該当する偏差値30台半ばのE大学を対象にアンケート調査を実施した（2022年12月）。有効回答者数は55名である。

4．研究成果

（1）研究の主な成果

組織の視角からの検討

組織の視角からの検討は、JREC-IN Portal に掲載されている求人公募情報に基づき、BF 大学で求められる研究能力がその他の大学とどの程度異なっているのか、という観点で行った。具体的には、「研究能力の評価の条件は、研究に対する社会的期待が（教育に対する社会的期待よりも）大きな大学で高くなる」という仮説等を設定し、学部単位で偏差値50以上の「教育研究期待型」、偏差値40以上50未満の「教育期待型」、偏差値40未満の「教育期待大型」の3群で求められる研究能力の評価の条件がどのように異なるのか、研究分野と職位も考慮した上で検討を行った。検討の結果、上記仮説を支持する結果は、研究分野と職位を問わず概ね確認された。しかし留意したいのは、偏差値40未満の「教育期待大型」でも研究能力の評価の条件は決して低いわけではないという点である。例えば、大学の大量化の受け皿になっている人文・社会科学

系であれば、博士の学位を有することが条件のものは、職位を問わず7%程度であるものの、博士の学位と同等の実績や能力が担保されていることが条件のものまで合わせると職位を問わずを3分の1を超える。

また、より詳細な検討を行うべく、偏差値40未満の「教育期待大型」をさらに細分化した検討や、特に人文・社会科学系に着目し、その下位分類にまで着目した検討を行った。前者の検討では、偏差値40未満の「教育期待大型」を、偏差値37.5の「弱選抜群」、偏差値35.0の「微選抜群」、ボーダー・フリー（河合塾による定義に基づくものであり、本研究の定義に基づく「BF（大学）」と同義でない）の「非選抜群」の3群に分類した検討を行ったのだが、上記の仮説を支持する結果は、研究分野と職位を問わず概ね確認されなかった。また、後者の検討では、上記の仮説を支持する結果は、人文・社会科学系の下位分類である「社会科学」では確認されたものの、「人文学」では確認されず、また、「社会科学」の下位分類である「商学・経済学関係」や「社会学関係」でも確認されなかった。

学生の視角からの検討

学生の視角からの検討は、BF大学生を対象としたアンケート調査を試行的に実施するところから始めた。このアンケート調査に基づき、BF大学生には「研究」がどのように捉えられており、それが教育の質保証にどのような影響を与えると考えられているのかを検討した。その結果、BF大学における「研究」は教育の質保証に（ポジティブな影響を与えるかどうかはさておき）ネガティブな影響を与えるリスクは低い、と結論付けた。

しかし、このアンケート調査は、BF大学生の持つ「研究」に対するイメージが、大学教員が一般的に想定している「学術研究」とは大きく異なるものである可能性を想定していなかった。そこで、BF大学生を対象としたインタビュー調査によって、学生の持つ「研究」に対するイメージとはどのようなものであるのか、また、学生は当該大学の教員に「学術研究」は必要だと考えているのか、といった点についての検討を行った。

特に社会科学系の学部にも所属する4年次生を対象としたインタビュー調査からは、以下の知見が得られた。第一に、BF大学生の中には、「研究」を「学術研究」のような意味合いで捉えることのできない者が少数ながらも存在することが確認された。ただし、そうした者は、特に学習面での問題を抱えている学生を中心に少数どころかむしろ多い可能性すらあることもあわせて指摘された。第二に、個々の学生が学習面での問題をどの程度抱えているかによって、当該大学の教員に「学術研究」が必要だと考えるかどうかについての認識が大きく異なる可能性を示唆する結果が確認された。

こうした知見の検証も視野に入れて実施した、BF大学生を主対象としたアンケート調査では以下の知見が得られた。第一に、BF大学生の中には、「研究」を「学術研究」のような意味合いで捉えることのできない者が、学習面での問題の有無（程度）にかかわらず多く、比較的優秀な者でも半数程度を占めていることが確認された。第二に、BF大学生の中には、当該大学の教員に「学術研究」がむしろ必要だと考える者が、学習面での問題の有無（程度）にかかわらず多く、問題を抱えている者でも3分の2程度を占めていることが確認された。第三に、学習面での問題の有無（程度）にかかわらず、当該大学の教員に「学術研究」が必要だと考えるのは総じて、自分の学びにとってプラスに働くと認識しているからであるが、それは「学術研究」によって専門性が担保されるかどうかはさておき、理解しやすさが担保されるのを期待するからであることが指摘された。

教員の視角からの検討

教員の視角からの検討は、「BF 大学における「研究」は教育の質保証にどのような影響を与えるのか」という問いに対して、これまでの研究では「何が」「どこまで」明らかになっているのかを整理するところから始めた。その結果、上記の問いに対しては、「少なくとも現時点では」、教員においても所属組織においても「偏り」がない限りにおいて、「研究」が教育の質保証に（ポジティブな影響を与えるかどうかはさておき）ネガティブな影響を与えるリスクは低い、と結論付けた。そしてその上で、上記の問いに対してもっともポジティブな「こたえ」を示した知見について、それが BF 大学の現場で教育にあたる当事者の認識を反映したものであるから尊重しなければならない反面、当事者の認識を反映したものだからこそ、「ノイズ」が生じている可能性に留意しなければならないと指摘した。そして、そうした知見が（どの程度）「ノイズ」によって歪められたものなのか、それを見定めるためには、BF 大学教員のみならず、BF 大学生を対象とした調査が必要であるとして、学生の視角からの検討の重要性を指摘している。

さて、上記のように、教員の視角からは、BF 大学教員を主対象としたアンケート調査を用いた検討を予定していたが、経費上の都合で変更を余儀なくされたため、学生の視角からの検討を補足する形で行うこととなった。すなわち、学生の視角からの検討の結果みえてきた、「研究」が何たるかを自分なりの言葉で表現することさえできないまま卒業してしまう学生が少なくない可能性があるという惨憺たる現実を打破するためには、「個々の授業において学生に「研究」の成果を伝える機会を意識的に増やしていくこと」が重要であると考えられるが、それがどんなに困難であり、またなぜそれが困難であるのかを明らかにすべく、BF 大学教員を対象としたインタビュー調査による試行的な検討を行った。その結果、「(学術)研究」の成果の教育への還元を困難なものにする要因として、「学生の学習面での課題に起因する要因」、「時間的制約に起因する要因」、「大学の組織風土に起因する要因」が確認された。なお、この知見は、教育系の学部にも所属する少数の教員を対象とした調査から得られたものであるため、知見の一般化には留意する必要があるが、上記の大学で実施したアンケート調査では、概ね同様の結果が確認された。

(2) 今後の展望

本研究では、BF 大学において「研究」がどのように捉えられており、それが教育の質保証にどのような影響を与えるのかを、組織、教員、学生という 3 つの視角から多角的に明らかにした。このうち学生の視角からの検討では、「教育」と「研究」を主要な機能とする「大学」に身を置きながら、「研究」が何たるかを自分なりの言葉で表現することさえできないまま卒業してしまう学生が少なくない可能性があるという惨憺たる現実がみえてきた。すなわち、本研究課題の核心をなす「BF 大学における「研究」は教育の質保証にどのような影響を与えるのか」という問いに対してこたえうる状況には現時点ではなく、BF 大学が「教育」と「研究」を主要な機能とする「大学」であろうとするのであれば、その矜持をもってこうした現実を打破すべく取り組んでいく必要があるということになる。こうした現実の打破こそが、BF 大学が「研究」を通じて教育の質保証を果たす一歩となるのである。

しかし、そうした理念的な議論が、BF 大学の生き残りという点においてどれだけの意義があるのか、と問われるとこたえに窮してしまう。というのも、本研究は（暗黙の裡に）「教育の質保証を通じて深刻な定員割れの状況から脱する」という理念的な前提に立つものだったからである。こうした前提を検証し、その両立可能性を見極めることは、BF 大学における教育の質保証のあり方に再考を促すものとなる。今後は、「BF 大学における教育の質保証は、大学の生き残りにポジティブな影響を与えうるのか」という新たな問いのもとで研究を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 葛城浩一	4. 巻 32
2. 論文標題 「大学教員としてのキャリアパスに立ちはだかる壁 - 人文・社会科学系の下位分類に着目した分析」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『大学教育研究』（神戸大学大学教育推進機構紀要）	6. 最初と最後の頁 147-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 葛城浩一	4. 巻 22
2. 論文標題 「大学教員とは何者なのか - ボーダーフリー大学教員に着目して」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『大学評価研究』（大学基準協会大学評価研究所紀要）	6. 最初と最後の頁 31-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宇田響	4. 巻 28
2. 論文標題 「ボーダーフリー大学生に学習習慣を身につけさせるのがなぜ困難なのか」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『教育学研究ジャーナル』（中国四国教育学会紀要）	6. 最初と最後の頁 63-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 葛城浩一	4. 巻 31
2. 論文標題 「大学教員としてのキャリアパスに立ちはだかる壁 - 大学の多様性に着目した分析」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『大学教育研究』（神戸大学大学教育推進機構紀要）	6. 最初と最後の頁 69-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 葛城浩一	4. 巻 7
2. 論文標題 「ボーダーフリー大学における「教育」と「研究」の両立 - 学生の視角からのアプローチ」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『兵庫高等教育研究』（兵庫大学・兵庫大学短期大学部高等教育研究センター紀要）	6. 最初と最後の頁 61-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宇田響・葛城浩一	4. 巻 7
2. 論文標題 「「学術研究」の「教育」への還元がなぜ困難なのか - 教員へのインタビュー調査による試行的検討」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『兵庫高等教育研究』（兵庫大学・兵庫大学短期大学部高等教育研究センター紀要）	6. 最初と最後の頁 135-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 葛城浩一	4. 巻 30
2. 論文標題 「大学教員としてのキャリアパスに立ちはだかる壁 - JREC-IN Portal掲載の公募情報を用いた基礎的分析」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『大学教育研究』（神戸大学大学教育推進機構紀要）	6. 最初と最後の頁 49-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宇田響・葛城浩一	4. 巻 6
2. 論文標題 「学生は教員の「研究」をどのように捉えているのか」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『兵庫高等教育研究』（兵庫大学・兵庫大学短期大学部高等教育研究センター紀要）	6. 最初と最後の頁 165-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 葛城浩一	4. 巻 5
2. 論文標題 「大学教育の現状と課題 - 「教育」と「研究」の関係性を中心に」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『兵庫高等教育研究』（兵庫大学・兵庫大学短期大学部高等教育研究センター紀要）	6. 最初と最後の頁 59-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宇田響・葛城浩一	4. 巻 5
2. 論文標題 「ボーダーフリー大学における「研究」は教育の質保証に及ぼす影響を与えるのか - 学生の視点からのアプローチ」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『兵庫高等教育研究』（兵庫大学・兵庫大学短期大学部高等教育研究センター紀要）	6. 最初と最後の頁 137-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宇田響
2. 発表標題 「社会科学系学部に所属する学生の学習意識・行動 - ボーダーフリー大学生に着目して」
3. 学会等名 大学教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 葛城浩一
2. 発表標題 「ボーダーフリー大学で求められる教員とは - 公募情報からみる教育能力と研究能力」
3. 学会等名 大学教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 葛城浩一
2. 発表標題 「大学教員としてのキャリアパスに立ちはだかる壁 - JREC-IN Portal掲載の公募情報を用いた分析」
3. 学会等名 日本高等教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 葛城浩一
2. 発表標題 「大学教員としてのキャリアパスに立ちはだかる壁 - 大学の多様性に着目して」
3. 学会等名 日本高等教育学会（研究交流集会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宇田響
2. 発表標題 「ボーダーフリー大学における「真面目」な学生の学習意識・行動の変化」
3. 学会等名 中国四国教育学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宇田 響 (UDA Hibiki) (30903190)	くらしき作陽大学・子ども教育学部・助教 (35304)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------